

12月



青森県 奥入瀬溪流 2019.9 撮影



あの日のあの川 リレー日記 ～第53話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起して語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第53話主人公 松永知也

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：静岡県大井川)

「旅で気づいた 川と人」

いつのこと？： 高校時代から現在

どこの川？： 静岡県大井川・芝川、青森県奥入瀬溪流、長野県千曲川など

「川と人」

これは、私の所属している白川先生のゼミのテーマの一つです。そんな「川と人」について、私が深く考えるきっかけとなった出来事について、書かせていただきます。

私は、小さいころからなぜか旅が好きで、家族と電車や車を使っていろいろなところに旅行に行っていました。そして、高校生になると自分一人で旅がしたい、自分の脚だけでいろいろな場所に行きたいと考えるようになり、親にスポーツ自転車を買ってもらい、それを使って旅をするようになりました。そして、旅の目的地には川や水辺が選ばれることが多くありました。

例えば、自転車で使った初めての旅は、地元にある大井川を上流に向かって登っていき千頭という観光地に向かうというも

ので、自然の美しさと独力で目的地に着いたという達成感でとても感動したのを覚えています。次に行ったのは静岡県富士宮市にある白糸の滝(芝川)でした。ここもまた非常に美しく、土産物屋のおじちゃんも優しくとてもいい思い出になりました。ほかにも柿田川湧水や本栖湖など、様々な水辺が旅の目的地になりました。しかし、当時の私は、意識的に水辺を選んでいたわけではなく、景色のいい場所がたまたま水辺だったというだけで、そこまで深く川や水辺について考えていたわけではありませんでした。

そんな自分が川や水辺について深く考えるようになったのは、大学2年生の9月、東北へ自転車旅に出た時のことです。その旅は青森から南下していき東北六県を回るというもので、初日は新青森駅からスタートし、青森市街を南に抜け、八甲田の森の中に入っていました。そこは鬱蒼とした樹々が左右から道を覆って薄暗く、曇りだったために道路はうすすら湿っており、なんとなく心細さを感じながら自転車をこぎ続けました。そうしているうちに、木々の隙間からさらさらとせせらぎの音が聞こえるようになり、ついには開けた場所に出ました。そこに広がっていたのは水と緑が織りなす奥入瀬溪流の風景でした。その頃になると徐々に青空も見え始め、あたり一帯が神秘的な雰囲気を感じていました。それを見た私は、先ほどまでの心細さの反動と、風景の美しさでいたく感動し、川の偉大さを初めて実感しました。そして、川に興味を持ち始めました。ここで、今までの旅を改めて振り返ってみると、今まで美しいと感じた風景には川や水辺があるものが多いということに気づきました。また、その後東北の旅を続け、秋田・岩手・宮城…と通過する中で、広大な水田地帯の真ん中を川が流れている様、川に沿って街並みが作られている様、子供たちが小川で遊んでいる様を見て、人は川に支えられて生きているのだと感じました。そして、川についてもっと深く知りたいと感じるようになり、白川先生のゼミに入る決意を愛車のサドルの上で固めたのでした。こうして東北の旅は川への興味という大きな収穫とともに幕を下ろしました。



図1 千曲川穂保地区の堤防上に積まれた瓦礫

それから1ヶ月ほどたった10月13日、衝撃的なニュースが飛び込んできました。令和元年東日本台風によって日本中で水害が発生したというニュースです。これを聞いて私は、被災地に行けば何か学びが得られるかもしれないと考え、特に被害が大きかった、長野県千曲川沿いの穂保地区に自転車で向かうことに決めました。そして3週間後の11月3日に被災地に入り、その様子を見学させていただきました。3週間もたったので正直もうほとんど片付いているかと思っていましたが、まったくそんなことはありませんでした。むしろ瓦礫の山がそこら中にあり、道のうえには乾いた泥が積もり、壁や電信柱の胸ほどの高さのところには洪水が来た跡がくっきり残って生々しく、とても悲しくつらい気持ちになりました。そしてこのような災害は、日本中、川さえあればどこでも起こりうるものだと実感し恐怖を感じると同時に、川について学び研究することは社会にとって大きな意義があることだとも感じました。



図2 穂保地区内の電柱

川には慈母としての側面と厳父としての側面があります。奥入瀬溪流の美しい風景や小川が子供たちの遊び場となっている様などは、川の慈母としての側面です。台風で暴れまわり住民に牙をむいた千曲川の様は、川の厳父としての側面です。そしてこの二面は表裏一体で、同じ川でも時には慈母となり、時には厳父となります。今私は、慈母としての川を最大限利用し、厳父としての川をよくなだめる、健全な「川と人」の関係を、かわまちづくりなどを通してつくっていったらよいと考えています。このよ

うな考えを持つきっかけを旅は与えてくれました。これからいろいろな場所、いろいろな川を旅して、川についての知識や考えを深め、「川と人」が健全な関係をつくる際の手助けができる人間になれるよう努力していきます。

(次は山倉大輝さんにバトンを託します)